

《論 文》

人形ファンタジーにおける ジェンダー

伊 達 桃 子

はじめに

人形やぬいぐるみは子どもにとって、もっとも信頼できる仲間であり、大人の世界への案内者であり、自分の分身ですらある。それらの人形に固有のアイデンティティを与え、命と意思を仮託して語り手もしくは主要人物とする物語を人形ファンタジーという¹。しかし、大人が子どものために作り与えるおもちゃには、社会化（socialization）の道具としての役割が期待されている。とりわけ人形は、何世紀にも渡ってジェンダー教育の道具として使用されてきた。

Kirsten F. Schmidt は、“Dolls are created for play and recreation, but their purpose is also to prepare girls for their later roles as mothers and housewives.” (Fass 909) と断言している。Lois R. Kuznets は、歴史上の人形の役割について、“dolls substituted for or supplemented younger siblings in preparing young girls for traditional nurturing roles; toy soldiers and toy weapons taught boys the arts of war . . .” (Kuznets 13) と述べている。

1 David L. Russell はこれらの物語を「おもちゃファンタジー」(Toy Fantasy) と名付けた (121)。本稿では特に人型をした人形を取り上げるため、「人形ファンタジー」(Doll Fantasy) という語を用い、人形を中心とするがファンタジーの要素を含まない作品には、「人形物語」(Doll Stories) の語をあてる。

このような見方は、あまりにも伝統的かつ固定的で、子どもの遊びの実態を反映していないという批判もある²。しかし、アメリカのおもちゃ研究によれば、2012年という近年でさえ、“... on the Disney Store website, gender was trumpeted above all other categories...” (Auster and Mansbach 376) であり、すべてのおもちゃが男女別のタブに分かれて掲載されている（どちらにも掲載されているものがわずかにあるが）。

こうした現実の人形と子どもの関係、そしてその背景にある大人のジェンダー教育への期待に対して、人形ファンタジーはどのような役割を果たしてきたのだろうか。人形ファンタジーが生まれた19世紀から20世紀にかけての、主に英米における流れを大まかにたどり、これらの物語が大人の期待に寄り添うように見えながら、時にそれを転覆していることを明らかにしたい。

I 19世紀の人形ファンタジー：監視と反抗

人形ファンタジーの萌芽とされるのは、Mary Ann Kilnerの*The Adventures of a Pincushion* (c.1784) や Dorothy Kilnerの*The Life and Perambulation of a Mouse* (c.1785) のような無生物や動物を主人公にした物語である。これらは18世紀に流行したit-narrativesの流れを汲んでおり、無力なものが無力さを逆手に取って人間社会を観察し、批判するところに妙味がある。19世紀に入り、it-narrativesは次第に大人向けの風刺物語から子ども向けの教訓物語へと変化していく。一方、19世紀の中頃には、子どもの本には少年向けと少女向けの物語の区別がはっきり見られるようになっていた。そこで数多く生まれてきたのが、人形を語り手とした自伝形式の少女向けの物語である³。

2 Formanek-Brunell (1992), Marcus (2007) らの論を参照。

3 it-narratives と人形ファンタジーのつながりに関しては、拙論 (2017) を参照。

Richard Henry Horne の *Memoirs of a London Doll* (1846) や Brenda [Georgina Castle Smith] の *Victoria-Bess: The Ups and Downs of a Doll's Life* (1879) に代表されるこれらの作品は、人形がさまざまな少女の手に渡り、運命の流転を経験しながら、人間社会の諸相を観察するという共通構造を持っている。人形の視点を取ることで、人形の扱いに表れる少女の道徳的美点や欠点を見せるだけでなく、その少女が属する家庭や階級への批判を覗かせることもできる。また、Victoria-Bess のように落ちぶれた人形自身が、おのれの美しさを鼻にかけていた過去の高慢を反省し、謙虚さを身につけることで、少女に範を垂れる場合もある。

これらの物語の多くが、少女と人形の関係を疑似母娘関係に見立て、少女に理想の母となる教育を施す目的で書かれたことは疑いようもない。Julie Gouraud は *Memoirs of a Doll; Written by Herself: A New Year's Gift* (1856) の前書きで “the first child—the tenderness of her mistress is the first ray of maternal love—a doll!” (50) と、明らかに人形を少女にとっての子どもと位置づけている。*Memoirs of a London Doll* の主人公 Maria を始め、多くの人形が持ち主を “mamma” と呼ぶこともそれを裏付けている。

しかし、少女と人形の関係は単に母娘というにとどまらず、より複雑な要素をはらんでいる。Gouraud 自身、人形で遊んだことのある女性をめとる男性を幸せ者と呼び、“he alone has seen his wife before he espouses her—the doll! it was himself in the past!” (53) とも述べている。人形は少女にとって伴侶でもあるのだ。さらに Gouraud は、少女が時に人形に加える激しい暴力も見逃してはいない。*Memoirs of a Doll* の主人公 Violet の2番目の持ち主 Adelaide は、“I am always being plagued and scolded about my lessons, and so I shall plague and scold you too.” (331) と宣言し、その通りに Violet を虐待する。ここでは人形は少女の身代わりの役目を負わされている。また、Violet は時に冷然

と持ち主の欠点をあげつらい、“we[dolls] require little girls to be amiable while very young.” (764) と明らかに大人の視点から少女に規律を課す。この時、少女と人形の母娘関係は逆転している。

Sharon Marcus はこのような少女と人形の関係を次のように要約している。

In Victorian doll tales, girlish love for dolls combines maternal tenderness and maternal aggression; a daughter's infatuation and passionate dependence; the sensual intimacy and companionship of sibling and marital love; and greedy lust for a beautiful object that can be purchased, then abandoned at will. (Marcus 158)

少女と人形の関係には、母と娘、大人と子ども、愛と憎悪、支配者と被支配者など、相反する要素が複雑に入り交じっていることがわかる。

その中で、19世紀の人形ファンタジーに特徴的な要素として Eugenia Gonzalez が指摘するのは、少女の道徳的監視役としての人形の役割である。*Memoirs of a Doll* において、Violet の最初の持ち主 Henrietta は理想的な少女として描かれる。彼女は母の指導のもと、Violet の衣装を手作りし、母に促されて、貧しい家族への寄付のため泣く泣く Violet を手放す。このように人形は “instruments available to parents for shaping their children, rather than as objects for children to play with at will” (Gonzalez 35) として使われている。しかし、物語の後半で、不実な少女 Matilda が母の目を盗んで Violet を我が物とした時、母に代わって彼女を断罪するのは Violet 自身である。“Ah! little girls, what very wicked things must be in progress, when you fear to be seen by your own mothers!” (718) Gonzalez はこう述べる。

Having become the narrators of their own adventures and memoirs, dolls no longer need the mother characters to act as relaters and interpreters of doll play. It is now to the dolls themselves that little girls must hold themselves accountable. At the same time, young readers are asked to identify with the girls who are the objects of the dolls' surveillance, imagining themselves to be similarly observed by their own dolls. (Gonzalez 40)

ヴィクトリア時代の人形物語は、少女に “to become industrious, prudent, neat, gentle towards the weak, generous to the poor, and loyal instead of fickle . . . as silent, dependent and acquiescent as dolls” (Marcus 159) と教えてきた。人形が主体性を持ち、自伝を綴るというファンタジーの要素は、人形自身が監視役となることで、この伝統的なジェンダー観に則った道德教育をさらに推し進める側面を持っていたのである。

しかし、人形と遊ぶ少女たちは、大人の思惑どおりにこれらの物語の教訓を受け止めていたのだろうか？ また、すべての人形ファンタジーがこのような教育を意図していたのだろうか？

19世紀のアメリカにおける少女の人形遊びを研究した Miriam Formanek-Brunell は、“Surprisingly . . . their play behavior was neither submissive nor instinctively maternal.” (122) と述べている。1つの好例として、Frances Hodgson Burnett が自伝 *The One I Knew the Best of All* (1893) の中で回想している人形遊びについて触れてみたい。

Burnett は少女の頃、人形遊びに夢中になっていたが、彼女の遊び方は姉妹たちが人形の家を整え、お茶会を開いているのとは違っていた。

. . . the Small Person[Burnett] entertained herself with wildly-thrilling histories, which she related to herself in an undertone, while she acted them

with the assistance of her Doll.

She was all the characters but the heroine—the Doll was that. She was the hero, the villain, the banditti, the pirates, the executioner, the weeping maids of honour, the touchingly benevolent old gentleman, the courtiers, the explorers, the king. (Burnett 47-48)

母親はある時、*Uncle Tom's Cabin* (1852) ごっこにふけていた Burnett が、鬼の形相で奴隷に見立てた人形を鞭打っているのを見て、娘の性向に不安を覚えたという。実際の少女たちが、物語の作者や親たちの思惑をはるかに超えたところで、人形を媒介に自由な想像の翼を広げていたことがわかる。

また、人形ファンタジー自体の中にも、主人公に理想の少女像を押しつけるように見えて、かえってそれを逸脱する作品が見られる。Clara Bradford の *Ethel's Adventures in the Doll Country* (1880) は、少女 Ethel が逃げ出した人形を追って、Doll Country に迷い込み、さまざまな冒険をするという *Alice's Adventures in Wonderland* (1865) ばりの作品である。

Ethel は *Memoirs of a Doll* の Adelaide 同様、叱られた鬱憤晴らしに人形を虐待する少女として描かれる。Doll Country は捨てられたり虐待されたりした人形が逃げ込む聖域であり、人形たちが “our guardians, and they punish all incivility to us” (Bradford 6) と呼ぶ無数の birch rod (カバの枝の鞭) に守られている。彼女の虐待に耐えかねて逃げた Pa-Ma doll を連れ戻して罰しようとした Ethel は、Doll Country に足を踏み入れる前から、神出鬼没の birch rod につきまとわれ、説教され、脅され続ける。一方で案内役として登場する Fairy doll は、“Patience is always rewarded.” (6) のような助言とともに優しく Ethel を導こうとする。

このような文字通りの飴と鞭の仕掛け、そして本の後半を占める Pa-Ma doll の自伝形式の語りは、表面的にはもちろん Ethel の悔悛を促し、彼女を理想の少女に教育する役割を持っている。しかし、birch rod のあまりに抑圧的な説教の数々 (“what business has a girl like you to think at all? you ought to allow other people to think for you.” (4) “Little girls should always be submissive to their superiors.” (12)) と、体罰へのサディスティックな熱意 (“he tries to make himself out such a just and righteous thing, and yet he is most spitefully anxious to hurt me.” (14)) は、Ethel の反発を招くだけでなく、読者に対しても彼の正当性を失わせてみせる。Gonzalez は、“If the rod serves as a mouthpiece for the educational precepts of his day, he also makes them seem ridiculous and untenable.” (46) と述べている。

何よりも、Ethel は最後まで悔悛して理想の少女になることはない。彼女がそもそも人形に母性的感情を抱いていないことは、“Pa-pa——Ma-ma” としゃべる人形を見て、“I wonder if she means you and my father, mamma, when she calls out; or is she asking for her own parents?” (20) といぶかしむ部分にも表れている。人形の “Ma-ma” が自分かもしれないとは、彼女は思いもしないのである。人形の視点から見た自分のむごい行いを聞かされても、彼女は “I m not a dreadful girl . . . the doll was mine, and I could do as I liked——besides, she deserved it.” (29) と抗弁する。birch rod に攻撃されかけてようやく、恐怖のあまり “I will never be unkind to my dolls again” (30) と叫ぶが、これが真の悔悛とは思えない。なぜなら、直後に目覚めて Doll Country の冒険がすべて夢だったと知った彼女は、まず自分の人形たちが無事に手元にあることを確かめ、次に Fairy doll を思い出して、“I will try to get one like it.” (30) と宣言するからである。彼女の人形に対する支配欲と所有欲が変わらないことを示すこの言葉で、物語は幕を閉じる。

Victoria Ford Smith は、この作品が “incorporates a theme characteristic of most doll narratives . . . how the doll can be deployed to configure and reconfigure power relationships.” (178) と述べている。確かに、この作品はファンタジーの力を借りて、少女と人形の不均衡な力関係を転覆する。しかし、Doll Country で沈黙を強いられ客体として扱われても、Ethel は屈服することはない。むしろこの作品は、人形と少女の両者に課せられる理不尽な制約を重ね合わせることで、当時のジェンダー規範への疑問を投げかけ、不屈の Ethel の「懲りなさ」を通して、その規範にささやかな抵抗を示していると読めるのである。

II 20 世紀の人形ファンタジー：少年と人形遊び

20 世紀に入ると、激動する社会情勢と、それがもたらす女性の社会進出を反映して、人形ファンタジーにおけるジェンダー観も変化していく。人形の自伝という形式は、Rachel Field の *Hitty: Her First Hundred Years* (1929) などに引き継がれていくが、物語の主眼は Hitty の持ち主の少女たちの道徳教育ではなく、Hitty の冒険そのものに移り変わっている。Kuznets が述べるように、“although Hitty herself comments on her owners’ actions in terms that echo adult censures of disobedient or erratic childish behavior, the narrative shows itself pro-adventure . . . and thus subverts adult strictures and attempts to control both children and their toys.” (29) なのである。

しかし、女性の自立という観点から 20 世紀の人形ファンタジーを読み解くことは、Kuznets らがすでに行っている。そこでこの章では、視点を少女から少年に転じ、男性のジェンダー規範と人形ファンタジーの関係について検討してみたい。

第 1 章で取り上げた 19 世紀の人形ファンタジーの中では、少女の人形への虐待が語られることもあったが、暴力という点では少女は少年の

比ではなかった。少年はほぼ常に“the natural enemies of dolls”(O'Reilly 36)として、人形を虐待し、壊し、哀れな姿に変形させる存在として描かれていた。

しかし、アメリカの心理学者 G. Stanley Hall は、いまや古典となった 19 世紀末の人形研究の中でこう述べている。

That boys are naturally fond of and should play with dolls as well as girls there is abundant indication. One boy in a family of girls, or boys who are only children, often play with dolls to seven or eight years of age. It is unfortunate that this is considered so predominantly a girl's play. Most boys abandon it early or never play, partly because it is thought girlish by adults as well as by children. (Hall and Ellis 16)

実際には、少年の中にも一定数の人形愛好者がいたにも関わらず、大人や同輩からの圧力がそれを阻んでいた。社会のジェンダー規範が、少女に対して同様、あるいはそれ以上に、少年に対しても働いていたことがわかる。

少年が遊ぶことを許され、むしろ推奨されていたのは、兵隊人形 (toy soldier) であった。Winston Churchill が少年時代、おびただしい兵隊人形を所有して戦争ごっこにふけていたことは有名である。少年たちは “march them about, or fire a cannon at them in an imaginary battle, hoping to blow the soldiers out of a fort” (McClary 193) のようにして遊んだ。こうした攻撃的で「男性的」な遊びが、少年の望ましい教育につながり、少女の人形遊びより知的だと見なされていたことは、H. G. Wells の *Little Wars* (1913) にも明らかである。この本は兵隊人形を使った戦争ごっこのルールブックだが、そのサブタイトルは *A Game for Boys from Twelve Years of Age to One Hundred and Fifty and for That More*

Intelligent Sort of Girl Who Likes Boys' Games and Books というのだから（下線筆者）。

しかし、これらの兵隊人形が人形ファンタジーの中で命を得る時、ジェンダー規範は強化されるのだろうか、それとも弱められるのだろうか？たとえば Hans Christian Andersen の *The Steadfast Tin Soldier* (1838) の場合、一見したところ答えは前者である。主人公の Tin Soldier は暗く危険な旅の間中、“steadfast” であり続け、Troll や Rat に脅されてもくじけず、Paper Ballerina への思いを貫く。それは男性および戦士としての理想像を提示しているように見える。

しかし Kirsten Møllegaard は、窓から落ちて持ち主が探しに来た時、彼が助けを求めなかった理由が「軍服の手まえ、大きな声でよんだりなんかしてはみともない」（アンデルセン 51）からだと言われていることに注目し、“He is literally cast in a mold, meaning a social gender role, from which he cannot escape.” (Jones 39) と論じている。彼の悲劇的な最期は、ジェンダー役割にとらわれることの危険性を示しているとも解釈できるのである。

人形だけでなく、持ち主の少年の視点を取り込んだ作品では、ジェンダーの問題はさらに複雑になる。一方では、成人男性であり戦士である兵隊人形は少年に対して優位に立ち、あるべきジェンダー役割を示すものとなる。しかし他方では、圧倒的なサイズの差による力関係が、少年を優位に置き、むしろ兵隊人形の保護者として振る舞うことを要求するのである。その時、人形と少年はどちらも「女性的」な特徴を帯びることになる——人形は弱者として、少年は疑似母親として。

Pauline Clarke の *The Twelve and the Genii (The Return of the Twelves)* ⁴ (1962) は、かつて Brontë きょうだいの創作の源となった the Twelves

4 括弧内はアメリカ版のタイトルを示す。

と呼ばれる兵隊人形たちが、20世紀の少年 Max に発見されてよみがえり、故郷 Haworth を目指すという物語である。the Twelves はそれぞれ個性的ながら、厳格な序列と規律を持ち、自助努力を旨とし、“Eat, drink and be merry, for tomorrow we die.” (Clarke 34) が口癖の、陽気で豪胆な兵隊のステレオタイプを体現している。しかし、人形である彼らは、信頼できる人間の保護に頼らざるを得ない。このような保護者を彼らは Genii と呼ぶ。

Max ははじめ唯一の Genii として彼らを守ることに苦心するが、やがて姉の Jane が加わる。このきょうだいの the Twelves への関わり方には興味深い性差が見られる。Max は彼らに最初に命を吹き込んだ Branwell Brontë 同様、彼らの行動を想像し、それによって彼らを導き助ける。一方、“Jane, being a girl, was really perhaps more interested in feeding the Twelves than seeing them on parade.” (122) とあるように、食事など彼らの身体面に気を配るのはもっぱら Jane である。Jane はまた、Max の警告がなければ彼らを赤ん坊のように可愛がりたいと思っているふしがあり (“Oh, his darling yawn,” (Clarke 102))、人形に母性的感情を向ける点で、19世紀の人形物語における理想的な少女像を踏襲している。

The Twelve and the Genii は先述したようなジェンダー役割に関する矛盾を潜在させながら、人形の自律性を強調し、保護者の役割を少年と少女に分担させることで、その矛盾を回避している。しかし、ほぼ同時代に、より意識的にジェンダー規範に挑戦する人形ファンタジーが世に出ている。Rumer Godden の *Impunity Jane* (1955) である。

この作品は、伝統的なジェンダー規範では明らかにタブーとされる関係——少年 Gideon と少女人形⁵Jane との結びつきを描いている。少女が少年人形で遊ぶことは、Wells が恩着せがましくも “intelligent” と呼んだように、まだしも許容される余地があったが、少年が少女人形で遊

ぶことは“sissy”とそしられる行為だった。もっとも、この物語でジェンダー役割を逸脱しているのは、実際には Gideon ではなく Jane である。現代においても、“girls are more likely than boys to find gender-neutral toys appealing or to cross gender lines” (Auster and Mansbach 377) と指摘されている。人形の家に関じ込められることを嫌い、木登りや川下りのような「男性的」な遊びをしたいという彼女の願いを感じ取って、その遊びの相棒に彼女を選んだことが、Gideon の唯一の逸脱行為であった。

ゆえに、Gideon は年上の少年たちに Jane を見つけられ、恐れていた“sissy”呼ばわりをされた時、次のように言い抜けることができる。“She isn’ t a doll, she’ s a model. I use her in my model train” (Godden 23) . 少女人形でなく、少年人形の範疇に入る“model”と Jane を名付け直すことで、Gideon は無事に同輩集団に受け入れられる。この物語は、少年ではなく少女のジェンダー規範を問い直しているのである。

1960年代後半から70年代にかけて、特にアメリカではフェミニズムの第二の波を受けて、ジェンダーに関する議論が盛んに行われた。Ricky Herzog は、その結果として“this era saw a large output of gender non-normative children’ s literature . . . children’ s books that contested notions of traditional gender roles and identities.” (Herzog 60) と述べている。

このような作品の一例としてよく挙げられるのが、Charlotte Zolotow の *William’ s Doll* (1972) である。ファンタジーでこそないが、この絵本も少年と少女人形の結びつきを描いている。人形に命が与えられない分、もっぱら問われるのは少年のジェンダー規範とその逸脱であり、

5 「少女人形」(girls’ doll) 「少年人形」(boys’ doll) という表現は、少女(少年)を模した人形ではなく、少女(少年)が遊ぶことを前提として作られた人形の意味で用いている。Jane は両者を兼ねているが、少女人形に“lady doll”や“baby doll”が含まれるように、両者は必ずしも同じではない。

William は Gideon と違い、明らかに「女性的」な遊びの対象として人形を欲している。“He wanted to hug it and cradle it in his arms and give it a bottle . . . and kiss it goodnight and watch its eyes close” (Zolotow 5-8) . 同輩たちは彼を“sissy”と蔑み、父親は心配してバスケットボールや電車などの「男性的」なおもちゃを買い与える。しかし、祖母は William の思いを理解し、望み通りの“baby doll”を買ってやる。抗議する父親を、祖母が“He needs it . . . so that when he’ s a father like you he’ ll know how to take care of his baby . . . so that he can practice being a father.” (30-32) と諭すのが物語の結末である。

この作品は革新的なジェンダー描写を行ったものとして、教育現場でも長く使われてきた。しかし、Herzog は“this book ultimately conforms to a conservative, rigid framework of gender behaviour” (68) として、次のように論じる。

Ultimately, the grandmother defines William’ s desire within the oversimplified and limiting hetero-normative framework of family. . . . William’ s desire for a female object is somehow transformed into a desire to be a father. (Herzog 69)

たしかに、人形遊びを「親になる訓練」にのみ還元するのでは、19世紀の少女向け人形物語と本質的に変わらず、単純に男女の役割を逆転させただけになってしまう。*Impunity Jane* と *William’ s Doll* は、少年と少女人形の結びつきを描くことで、ある程度まで伝統的なジェンダー規範を揺るがしつつも、その規範を脱構築するには至らなかったと言える。

McClary によれば、1960年代以降、兵隊人形に代わって“the Batmen, the Superheroes, and the G.I.Joes, the toy action figures of today” (193) が少年人形の地位を占めた。1980年に第1作が発表され、

1998年の第5作をもって完結したLynne Reid Banksの*The Indian in the Cupboard* シリーズは、こうした兵隊人形の後継者たちを登場させている。

少年Omriは、戸棚に曾祖母の遺品である鍵をかけると、中に入れたプラスチックの人形が生きた人間になることに気づく。彼と親友のPatrickはそれぞれ、Little Bull（一部のアメリカ版ではLittle Bear）というIroquois部族のNative Americanと、BooneというCowboyに命を吹き込む。しかしOmriはすぐに、彼らが意のままになるおもちゃではなく、それぞれの時代に実際に生きている人間であり、いわばミニチュア化を伴うタイムトラベルで現代に連れてこられたことを理解する。

一見したところ、この作品は非常に「男性的」なファンタジーだ。主要人物はすべて少年か男性の人形であり、暴力や流血の場面も多い。人形たちはそれぞれの歴史と文化を背負ってお互いに争い、あわや殺し合う。しかし、Omriは彼らとの関わりを通じて、“the more feminine aspects of his character” (Rustin and Rustin 105) を見出し、発達させていくことになる。

まず彼は、人形たちの衣食住をはじめとした身体的要求に応えなければならぬ。彼らの身体描写はClarkeのthe Twelvesよりはるかにリアルであり、Omriは兄や大人たちから彼らを隠しながら、その要求を満たし、時には聞き分けのない子どもに対する母親のように、我慢させることを学んでいく。彼は自身の母親のやり方をまねて、初めて料理に挑戦し、嫌がるBooneに体を洗わせる。象徴的なのは、Little Bullが“With Iroquois, mother find wife for son. But Little Bull mother not here. Omri be mother and find.” (Banks 91) と要求するくだりである。Omriは19世紀の人形物語の少女と同じく、疑似母親として人形たちの福利厚生に責任を持つことを期待されているのである。

もちろん、身体的な世話をすることだけが「女性的」な面なのではな

い。Omri は人形たちと出会うことで、それぞれの文化的、歴史的背景により関心を持つようになる。テレビの西部劇ではわからない歴史を調べ、Little Bull と Boone それぞれのかけ離れた価値観を理解し、折り合える点を探る。最後には、Ethel とは逆に、自分の所有欲を抑えて、彼らを元の時代に帰す決心をする。暴力や支配ではなく、共感と想像力、それに基づく交渉力が Omri の発達させる能力であり、それは伝統的には「女性的」な特質と言える。

この物語には、*The Twelve and the Genii* と違って少女が関わっていないため、2人の少年のうち、より繊細で想像力豊かな Omri の「女性的」な部分が際立つ。Omri が3人兄弟の末子で、まだ母親と近いこと、またそもそも魔法の鍵が、曾祖母から母親という女系で受け継がれてきたことも注目すべき要素である。Rachel L. Carazo は、“female power, especially female material power, remains central to the novel despite their seeming relegation to the backstory.” (Jones 58) と述べている。

The Indian in the Cupboard シリーズは、Native American の描写に関して批判されることが多く⁶、また女性の描き方にも問題がある⁷。しかし、少年と人形の関係を描く中で、伝統的なジェンダー規範に従うように見えながら、少年の造形においてそれを転覆している点で、この作品の意義は見逃せない。

6 一例を挙げれば、1991年の全米図書協会全国大会で、Naomi Caldwell-Wood と Lisa A. Mitten は、このシリーズが“foster continuations of classic blatant stereotypes”として排斥している。

7 Little Bull の妻となる Twin Stars (一部の版では Bright Stars) は、ほぼ人身売買のような方法で連れてこられる。興味深いことに、1995年の映画版 (Frank Oz 監督) は、この点を修正している。

おわりに

子どものおもちゃ遊びは、どの程度社会化に影響するのだろうか？人形とそれにまつわる物語は、子どもに特定のジェンダー観を刷り込むのに役に立つのだろうか、それとも性別によるおもちゃ嗜好の差は、ある程度まで生得的なものなのか？この問いに答えるのは容易ではない。

しかし、アメリカにおけるおもちゃのジェンダー化 (Gendering) を調べた Elizabeth Sweet の研究によれば、20 世紀を通しておもちゃにはその時代のジェンダー観が反映され続けている。1905 年には性別によるおもちゃの区別はほとんど見られなかったが、20 世紀半ばには少女に人形やままごとおもちゃを、少年に科学おもちゃや戦争おもちゃをあてがうことが当たり前になっていた。1975 年から 1985 年にかけて、“some broadening in the gender roles” (Sweet) が確認されたが、20 世紀末にはその反動か、伝統的なジェンダー化おもちゃへの回帰が見られると Sweet は言う。

その中で人形ファンタジーが、大人や社会が望ましいと考えるジェンダー規範を提示するだけでなく、それを逸脱し時には転覆していることは興味深い。それこそが、人形ファンタジーが持つ “*subversive forces acting out crises of individual development generally repressed by modern society*” (Kuznets 7, original emphasis) としての機能であろう。少年であれ少女であれ、子どもの分身として、仲間として、親または子の代役として、生きている人形は常に、大人の目をくぐって弱く小さい者が勝利する物語を紡ぎ続けるのである。

今回は 20 世紀の少女人形、特に Barbie や American Girl などの影響に目を届かせることができなかった。21 世紀に入り、性の多様性が叫ばれる中で、人形ファンタジーがどのようにジェンダーを描いていくのかと併せて、稿を改めて検討したい。

引用文献

- Auster, Carol J. and Claire S. Mansbach. "The Gender Marketing of Toys: An Analysis of Color and Type of Toy on the Disney Store Website." *Sex roles* vol. 67, 2012, pp. 375-88.
- Banks, Lynne Reid. *The Indian in the Cupboard*. Doubleday, 1980.
- Bradford, Clara. *Ethel's Adventures in the Doll Country*. John F. Shaw & Company, 1880.
- Burnett, Frances Hodgson. *The One I Knew the Best of All*. F. Warne, 1974.
- Caldwell-Wood, N. and L.A. Mitten. " "I" Is Not for Indian: The Portrayal of Native Americans in Books for Young People." *American Indian Library Association*. June 29, 1991.
<http://www.nativeculturelinks.com/ailabib.htm> Accessed 25 Sep. 2021.
- Clarke, Pauline. *The Return of the Twelves*. 1962. Coward-McCann, 1964.
- Fass, Paula S. editor. *Encyclopedia of Children and Childhood in History and Society*. Macmillan Reference USA, 2004.
- Forman-Brunell, Miriam. editor. *Deconstructing Dolls: Girlhoods and the Meanings of Play*. Berghahn Books, 2021.
- Formanek-Brunell, Miriam. "Sugar and Spite: The Politics of Doll Play in Nineteenth-Century America." *Small Worlds: Children & Adolescents in America, 1850-1950*, edited by Elliott West and Paula Petrik. University Press of Kansas, 1992.
- Godden, Rumer. *Four Dolls*. Greenwillow Books, 1983.
- Gonzalez, Eugenia. "'I Sometimes Think She Is a Spy on All My Actions': Dolls, Girls, and Disciplinary Surveillance in the

- Nineteenth-Century Doll Tale." *Children's Literature* vol. 39 no.1, 2011, pp. 33-57.
- Gouraud, Julie. *Memoirs of a Doll : Written by Herself : A New Year's Gift*. Routledge, 1854.
- Hall, Granville Stanley and Alexander Caswell Ellis. *A Study of Dolls*. E. L. Kellogg, 1897.
- Herzog, R. "Sissies, Dolls, and Dancing: Children's Literature and Gender Deviance in the Seventies." *The Lion and the Unicorn* vol. 33 no. 1, 2009, pp. 60-76.
- Jones, Tanya editor. *Toy Stories: The Toy as Hero in Literature, Comics and Film*. McFarland, 2017.
- Kuznets, Lois R. *When Toys Come Alive : Narratives of Animation, Metamorphosis, and Development*. Yale University Press, 1994.
- Marcus, Sharon. *Between Women : Friendship, Desire, and Marriage in Victorian England*. Princeton: Princeton University Press, 2007.
- McClary, Andrew. *Toys with Nine Lives : A Social History of American Toys*. Linnet Books, 1997.
- O'Reilly, Robert Mrs. *Doll World, or, Play and Earnest : A Study from Real Life*. Bell and Daldy, 1872.
- Russell, David L. *Literature for Children : A Short Introduction*. 1991. 2nd ed. Longman, 1994.
- Rustin, Margaret, and Michael Rustin. *Narratives of Love & Loss : Studies in Modern Children's Fiction*. Verso, 1987.
- Smith, Victoria Ford. "Dolls and Imaginative Agency in Bradford, Pardoe, and Dickens." *Dickens Studies Annual: Essays on Victorian Fiction* vol. 40, 2009, pp. 171-97.
- Sweet, Elizabeth. "The "Gendering" of Our Kids' Toys, and What We

Can Do About It." *New Dream: More of What Matters*, October 7, 2011.
<https://newdream.org/blog/2011-10-gendering-of-kids-toys> Accessed
21 Sep. 2021.

Zolotow, Charlotte. *William's Doll*. Harper & Row, 1972.

アンデルセン, ハンス・クリスチャン 『しっかりもののすずの兵隊』 楠
山正雄訳, 青空文庫, 1836.

伊達桃子 「It-Narratives と人形ファンタジー」 『社会科学雑誌』 (奈良学
園大学社会科学学会) vol. 18, 2017, pp. 109-21.

